

2 両側水腎症を呈した増殖性膀胱炎に 対して漢方薬が奏効した1例

松山赤十字病院 泌尿器科

**林 哲太郎、鍵山 義斗、長坂 啓司、松崎 信治、
野田 輝乙、矢野 明、田丁 貴俊**

背景:水腎症を合併した増殖性膀胱炎の報告は少なく、治療法も確立されていない。私たちは柴苓湯で長期間の病勢コントロール可能であった増殖性膀胱炎症例を経験したので報告する。

症例: 51歳の男性、検診の超音波検査で膀胱壁肥厚を指摘され、当院受診となった。膀胱鏡では頸部から後三角部まで一部に乳頭状腫瘍を含む浮腫状の腫瘍を認め、両側尿管口も確認できなかった。CT、MRIでは膀胱頸部から後三角部に腫瘍性病変を認め、左水腎症も認められた。診断と治療を兼ねてTURBTを行い、病理結果は増殖性膀胱炎であった。悪性所見が認められなかったため、定期経過観察の方針となった。しかし、診断から9ヶ月後に左水腎症の増悪、1年後に右水腎症を認め、診断から1年後に両側尿管口のバルーン拡張術を行い、柴苓湯9g/日の内服を開始した。その後病状が安定していたが、診断から4年3ヶ月後に膀胱頸部の浮腫状腫瘍の再燃を認め、柴苓湯9g/日に加えてプレドニン5mgを2ヶ月間投与して、膀胱頸部の増殖性膀胱炎の消失を確認した。以後も柴苓湯9g/日を継続したが、診断から6年後に軽度の両側水腎症が再燃し、プレドニン5mgを3ヶ月間投与、2.5mgを1ヶ月間投与して、水腎症の消失を確認した。以後も柴苓湯9g/日をつけ、診断から7年後からは柴苓湯6g/日に減量、診断から11年後から柴苓湯3g/日に減量し、診断から11年4ヶ月後に柴苓湯の内服を終了した。現在、診断から11年7ヶ月が経過するが、増殖性膀胱炎と水腎症の再発を認めていない。

考察:増殖性膀胱炎は悪性腫瘍との鑑別のためTURで診断治療がされることが多く、抗生剤や消炎剤といった保存的治療が行われることが多いが、副腎皮質ステロイドで改善したとの報告も認められる。我々も手術的治療と短期間のステロイド投与も行ったが、約11年の柴苓湯の投与で腎機能の低下なく、排尿状態も維持できた両側水腎症を合併した増殖性膀胱炎症例を経験した。有害事象を認めず、長期間の病勢コントロールが可能で、内服治療も終了できた点で、本疾患に対して柴苓湯は有効と評価した。